

数 量 詞 遊 離

嶋 村 誠

I はじめに

言語学の究極的な目標は普遍文法の確立にある。普遍文法は各言語間の共通点と相違点をも明らかにしなければならないが、そのためには、普遍文法確立への貢献を念頭に置きながら、各個別言語の言語事実を余すところなく規定することに努力が払われなければならない。そこで、まず、言語学の究極的な目標を達成するためにはいかなる概念が必要か、ということが問題となる。関係文法 (Relational Grammar) では、主語 (SU)、直接目的語 (DO)、間接目的語 (IO) といった文法関係を統語論における理論的要素として認め、さまざまな統語現象の一般性をこれらの文法関係を基にして規定しようとしている¹⁾。これは NP とか VP 等の範疇を理論的要素として認め、SU・DO などの文法関係は派生的に規定し得るだけであって、いかなる変形も文法関係に言及してはならないとする N. Chomsky の考えに²⁾、真向から挑戦するものである。

本稿は、関係文法でよく問題にされる数量詞遊離 (Quantifier Float、以下 QF と略記する) と呼ばれる現象を取り上げ、英語と日本語を対象として、QF を規定する際の問題点の一端を明らかにしようという試みである。次節では、英語の QF について、日本語の QF との比較を念頭におきながら考察する。3 節では、日本語の QF に関する分析を検討する。日本語で QF を許すか否かは、文法関係によるとする分析 (便宜上、文法関係論と呼ぶ) と、表層の格

1) 関係文法について詳しくは Johnson (1974a, b), Perlmutter and Postal (1974)、および Cole and Sadock (1977) 所収の論文、特に Johnson (1977), Gary and Keenan (1977) 等を参照されたい。

2) Cf. Postal (1976), p. 151.

(Case)によるとする分析(格論)があるが、果してどちらかが正しいと言えるかということに主眼を置いて検討する。4節では、3節で検討するどちらの分析をとるにしても、捉えることができないと思われる言語事実を、談話文法の立場から考察する。

II 英語の QF

QFとは、数量詞を名詞句内から名詞句外へ取り出す現象のことをいう³⁾。従って、遊離した数量詞は元の名詞句の外で別の構成要素の一部を成すことになる。英語の典型的な数量詞表現として次のようなものがある。

- (1) a. $\left. \begin{array}{l} \text{All} \\ \\ \text{All of} \end{array} \right\} \text{the students went back.}$
- b. $\left. \begin{array}{l} \text{Both} \\ \\ \text{Both of} \end{array} \right\} \text{the students went back.}$
- c. Each of the students has a car.
- (2) a. The students all went back.
- b. The students both went back.
- c. The students each have a car.
- (3) a. All of them went back.
- b. Both of them went back.
- c. Each of them has a car.
- (4) a. They all went back.
- b. They both went back.
- c. They each went back.

3) 厳密に言えば [Quantifier of NP] から of 消去変形の後、QF により [NP]_{NP} Quantifier となり、更に数量詞を他の位置へ移動する随意変形を受けるが、本稿では、数量詞を NP の外に取り出すことに焦点を絞って論ずる。

(1a)と(2a)を比べると、表層の構造はそれぞれ異なっている。しかし、基本的な意味的機能の面から見ると、(1a)のように数量詞が名詞句内にあるときも、(2a)のように名詞句外にあるときも同じであると考えられる。事実、(1)と(2)、(3)と(4)は、同義文として成り立つ。生成文法では、同義文は同一の深層構造から派生すると考えられているので、数量詞が名詞句の内にあるものと外にあるものを、どちらか一方に近い深層構造から派生することになる。どちらのタイプを深層構造とするかであるが、意味的にみると名詞を限定しているわけであるから、名詞句内にあるものの方が深層により近いものと考えられる。そこで、(1)(3)のタイプから(2)(4)のタイプを派生する規則が必要となり、それを QF と呼ぶことにする。

QF の結果、元の名詞句内に残る名詞が、(1)(2)では一般の名詞であり、(3)(4)では代名詞である。英語では SU の名詞句からの QF は許されるが、その他の名詞句からは許されない⁴⁾。事実、(5a)(6a)(7a)の DO からそれぞれ QF を経て派生した(5b)(6b)(7b)は非文である。

- (5) a. He killed all (of) the beasts.
 b. *He killed the beasts all.
- (6) a. He killed both (of) the beasts.
 b. *He killed the beasts both.
- (7) a. He killed each of the beasts.
 b. *He killed the beasts each.

(5)―(7)では、QF を終えた名詞句内の主名詞が一般の名詞であるが、(8)(9)の b のように、

- (8) a. He killed all of them.
 b. He killed them all.

4) 英語では、遊離する数量詞は *all*, *both*, *each* に限られる。

Cf. *Some of the students went back.*

**Students some went back.*

- (9) a. He killed both of them.
 b. He killed them both.
- (10) a. He killed each of them.
 b. *He killed them each.

代名詞の場合は DO からの QF も許されるではないかとの反論が予想される。事実、Postal (1974, p. 109)、Dougherty (1970) 等は、代名詞の場合をも QF として扱っていた。(10b)はいずれにしても非文であり反例にならない。問題は(8b)と(9b)であるが、これらの文の *them all* および *them both* は依然として同一の名詞句内にあると考えられる。(11)のように、間に他の要素が入ると非文になることはそのことを示唆している。

- (11) a. *He killed them, I think, all.
 b. *He killed them, I think, both.

そこで、(8b)(9b)のような文をも QF によるとしていた Postal も後に Postal (1976, n. 11) では別個のものとして扱っているが、この方が妥当だと思われる。

次にあげる(12)―(17)では、一見、表層で DO となっている名詞句から数量詞が遊離して b が派生しているかに見える。

- (12) a. He expected all (of) the students to hand in the term paper.
 b. He expected the students all to hand in the term paper.
- (13) a. He expected both (of) the students to hand in the term paper.
 b. He expected the students both to hand in the term paper.
- (14) a. He expected each of the students to hand in the term paper.
 b. He expected the students each to hand in the term paper.
- (15) a. He expected all of them to hand in the term paper.
 b. He expected them all to hand in the term paper.
- (16) a. He expected both of them to hand in the term paper.
 b. He expected them both to hand in the term paper.

- (17) a. He expected each of them to hand in the term paper.
 b. He expected them each to hand in the term paper.

(12b)と(15b)について、その内部構造を探ってみると、(15b)は(18a)と(18b)の2通りの解釈が可能であるが、(12b)は(19a)の解釈のみ可能で、(19b)の解釈は不可能である。

- (18) a. He expected [them] [all to hand in the term paper].
 b. He expected [them all] [to hand in the term paper].
 (19) a. He expected [the students] [all to hand in the term paper].
 b. *He expected [the students all] [to hand in the term paper].

構成素の間に挿入句を入れてみると(21b)が非文となることは、(19b)の解釈が不可能なことを示唆している。

- (20) a. He expected them, I think, all to hand in the term paper.
 b. He expected them all, I think, to hand in the term paper.
 (21) a. He expected the students, I think, all to hand in the term paper.
 b. *He expected the students all, I think, to hand in the term paper.

(18b)の *them all* は、既に触れた通り、数量詞が元の名詞句内に残っているので、QF とは考えられない。問題は(18a)および(19a)の解釈としての(12b)と(15b)の中の *all* であるが、これは *them* および *the students* が繰り上げられる以前に補文内で QF を受けたもので、従って、DO からの遊離ではなく、補文中の SU からの遊離だと考えられる。(13b)(14b)(16b)(17b)についても(12b)と(15b)についてと同様である。

次に、IO からの QF に話を進める。

- (22) a. I gave all the kids a dime.
 b. (?)I gave the kids all a dime.

- c. *I gave the kids a dime all.
- (23) a. I gave both the kids a dime.
 b. I gave the kids both a dime.
 c. *I gave the kids a dime both.
- (24) a. I gave each of the kids a dime.
 b. I gave the kids each a dime.
 c. I gave the kids a dime each.

(22)–(24)では、それぞれ、a から b および c が派生したと考えられる。(22b)については、少し不自然だとする話者もあるが、本人も用いるしよく耳にもするとの反応が返ってきた。名詞句と数量詞が隣接した(22b)(23b)(24b)はすべて文法的だとしてよさそうである。しかし、これらの文は、元の名詞内での数量詞の移動であると考えられるため、QF とは区別すべきだと思われる。(24c)は問題なく許容される文であるが、これも Postal の言う Each-shift の例であって QF とは区別すべきであろう。(22c)(23c)は全くの非文である。従って、英語では、IO からの QF は非文を生ずると言ってさしつかえないと思われる。

また、SU、DO、IO 以外の文法関係にある名詞句からの QF も非文を生む。

- (25) a. “You’re not listening.”
 “I am, though not with both ears.”
 b. “You are not listening.”
 “*I am, though not with ears both.”

以上のように、英語の QF は SU の名詞句からのみ可能で、他の文法関係にある名詞句からは許されない。では、格論の立場をとって、主格の名詞句からのみ遊離するとも言えるであろうか。

関係文法では、SU、DO、IO、および斜格目的語(OO)と呼ばれる文法関係の間には(26a)のような階層がみられ、左側のものほど優先的に文法規則に影響されやすく、また、文法現象を引き起こしやすい、と仮定している。SU、DO、

IO の3つは文法項 (terms) と呼ばれる。QF に関して言えば、一般に、文法項のみが QF を許す。OO が QF を許す言語はない。また、言語により QF を許す項が異なり、その異なり方が段階的である。Sのみ可、SとDOのみ可、および、すべての文法項からの QF が可、の3種類の言語がある。(26a)の階層の中で、ある位置を占める項からの QF が可能な言語では、それより左側の項はすべて QF を許す。DOからのみ可で、Sからは不可とか、SとIOからのみ可でDOからは不可、といった言語はない。英語は、すでにみてきたように、Sのみが QF を許す言語、ということになる。また仏語や独語はすべての文法項が QF を許す言語と言われている。

(26) a. Relational Hierarchy (RH)

SU < DO < IO < OO

b. Accessibility Hierarchy (AH)

SU > DO > IO > OBL > GEN > OCOMP⁵⁾

RH に類似したものとして、Keenan and Comrie (1976, p. 66) が関係文法とは別個にたてた階層(26b)がある。これは、関係詞化を許す順位を基にしてたてた階層である。それぞれの項には文法関係を示すものが多いが、これを格の序列と解することもできるかも知れない⁶⁾。しかし、井上 (1976、1978) のように SU を主格と置き換えると、英語の主格は、QF を許さない主格補語となることもあるので、英語の QF に関しては、文法関係論のみ成り立つことになる。

Ⅲ 日本語の QF

日本語の代表的な数量詞表現として次のようなものがある。

(27) a. 店の中にはいると、二人の男が台の前にならんで、大きなアイロン

5) SU = subject, DO = direct object, IO = indirect object, OBL = major oblique case NP, GEN = genitive, OCOMP = object of comparison.

6) 事実、井上(1976)、p. 187 や、井上(1978)、p. 91 では格の序列と解釈している。

を動かしていた。

(松本清張『ゼロの焦点』)

b. 庭の飛び石づたいの横の低い刈りこみに二羽の蝶がたわむれていた。

(川端康成『眠れる美女』)

c. 長い首を水面につきだして、二三の鶺鴒が沖を泳いでいる。

(三島由紀夫『潮騒』)

(28) a. ポプラの木の上の空に、お羽黒トンボが四五匹飛んで来て、クルクル旋回している。

(庄野潤三『舞踏』)

b. 電車の中には坊さんが三人すわって話していた。

(松本清張『ゼロの焦点』)

c. ……足もとから黄蝶が二羽飛び立った。

(川端康成『雪国』)

(27)では、明らかに数量詞が連体修飾構造を成して、構造上、名詞を限定する働きをしている。(28)では、名詞句外に位置して、副詞的な働きをしていると考えられる。しかし、意味的には、英語の場合と同様、(27)においても(28)においても、ともに、名詞を限定するという点では同じであり、(27)と(28)のパターンを相互に入れ換えて、

(29) a. 店の中にはいると、男が二人台の前にならんで、大きなアイロンを動かしていた。

b. 庭の飛び石づたいの横の低い刈りこみに蝶が二羽たわむれていた。

c. 長い首を水面につきだして、鶺鴒が二三沖を泳いでいる。

(30) a. ポプラの木の上の空に、四五匹のお羽黒トンボが飛んで来て、クルクル旋回している。

b. 電車の中には三人の坊さんがすわって話していた。

c. ……足もとから二羽の黄蝶が飛び立った。

としても、基本的な意味は変わらない。生成文法では、互いに同義な文は同一

の深層構造から派生すると考えられているので、(27)と(29)、(28)と(30)の互いに対応している文を、一つの深層構造から導く手だてが必要になる。では、どちらの構造を深層構造とするかであるが、意味的にみて数量詞が名詞を限定修飾しているのだから、そのことを構造の上で直接表わしている(27)(30)のタイプを深層構造とし、そこから数量詞が遊離して(29)(28)のタイプの文が派生する規則を QF とするのが妥当であるということになる⁷⁾。

(28)(29)を(30)(27)の「主語」から数量詞が遊離して派生したものと考えることに問題はないと思う。それは、日本語の主語は次のような規準で認定できるからである⁸⁾。

(31) 主語の認定規準

- a. 尊敬語化(「お……になる」)を引き起こす⁹⁾。
- b. 再帰代名詞化(「自分」)を引き起こす¹⁰⁾。

例えば、(32a)を「お……になる」の形式を用いて尊敬表現(32b)にすると、敬意が「坊さん」に向けられており、(32c)の「自分」は「坊さん」と同一指示的である。従って、(32a)の「坊さんが」は主語であると認定される。

- (32) a. 坊さんが席に坐った。
 b. 坊さんが席にお坐りになった。
 c. 坊さん_iが自分_iの席に坐った。

日本語では、(28)(29)のように SU から数量詞が遊離したものの他に、DO

7) 日本語の QF 現象に早くから注目した奥津(1969)では、[蝶二羽]の形式を基本構造とし、[二羽の蝶]の形式は、別の基本構造から、「～だ」「～である」構文から名詞修飾構造を導くのと同一変形で導びいている。また、X 理論を用いた研究に神尾(1977)があり、数量詞を名詞句外に取り出してしまふ規則 QP I と、等位成分からの遊離のように、移動した数量詞がより大きな名詞句内、即ち、元の名詞句の上にある名詞句内で移動する場合の規則 QP II とを区別し、移動変形に関する普遍的制約との関連を論じている。

8) 他にも認定規準が考えられるが、本稿の議論ではこの2つで十分である。SU の普遍的な定義については Keenan(1976)を参照されたい。

9) McCawley(1976)を参照されたい。

10) Harada(1976)を参照されたい。

から遊離したものも存在する¹¹⁾。

- (33) a. 思い切り熱くした湯タンポを三つ、布団の中に入れた。
(庄野潤三『静物』)
- b. ラッセルを三台備えて雪を待つ、国境の山であった。
(川端康成『雪国』)
- c. コースロープを全部取り外した水面の真中にたった一人、男の顔が浮んでいる¹²⁾。
(庄野潤三『プールサイド小景』)

IOからの遊離は、個人差もあるが、一般には、不自然な文を生ずるといわれている。

- (34) a. サンタのおじさんが三人の子供たちにチョコレートをやった。
b. *サンタのおじさんが子供たちに三人チョコレートをやった。
- (35) a. おつかいを二三の男の子にたのんだ。
b. *?おつかいを男の子に二三たのんだ。

(36a)(37a)のOOからQFを受けた文(36b)(37b)は非文である。

- (36) a. 私と朽助とはタエトと一しよに、一本の木の下へ行って見物していたのである。
(井伏鱒二『朽助のいる谷間』)
- b. *私と朽助とはタエトと一しよに、木の一本下へ行って見物していたのである。
- (37) a. バスの乗客の大半は、これまでに停まった二つの停留所で降りてしまった。
(吉行淳之介『夕暮まで』)
- b. *バスの乗客の大半は、これまでに停まった停留所で二つ降りてしまっ

11) 日本語のSU・DO・IOの定義については、後に触れる。

12) 日本語では、ほとんどの数量詞が遊離する。cf. 注4.

た。

以上のことを(26)の RH に照らし合わせてみると、(英語は SU からなのに対して)日本語は、SU、DO から数量詞が遊離し、IO からは個人差がある言語、というようにして位置づけることができる。ただし、これまでの観察が正しければの話である。

ところで、Shibatani (1977) は、主に日本語と朝鮮語の資料を基にして、QF は文法関係によってではなく、表層の格によって決るのだと主張している。既ち、日本語の場合、名詞句が主格の助詞「が」か対格の助詞「を」を伴う名詞句に適用されるとしている。そこで、日本語の QF を左右するのは、文法関係なのかそれとも表層の格なのかということを検討してみよう。

(32)で触れたように、(38a)の「坊さんが」は主語である。また、主格助詞「が」を伴っているので主格でもある。そこで、(38a)に QF を適用した(38b)のような文は、文法関係論と格論の正否を決める決め手にはなり得ない。

- (38) a. 三人の坊さんが席に坐った。
b. 坊さんが三人席に坐った。

一般に、主格と SU、対格と DO、与格と IO が対応することが多いが、QF の依存関係を明らかにするには、これらが対応していない場合を調べる必要がある。

日本語の動詞「解る」「出来る」「要る」所有文の「ある」等は、SU に与格をとり、DO に主格をとる。

- (39) a. 三匹のネズミに猫の言葉が解った。
b. 四人の先生たちに隠し芸が出来るとは知らなかった。
c. 五人の入院患者に血液が要る。
d. 数人の先生たちにあだ名がある。

(39)の与格名詞が SU として働いていることは、尊敬語化・再帰代名詞化のテストを試してみれば確認できる。

- (40) a. 社長には自分の家の猫の言葉がお解りになる。
 b. 先生たちに自分の自慢の隠し芸がお出来になるとは知らなかった。
 c. 先生には自分の信念がおありになる。

(39)の与格主語から数量詞を遊離させることはできない。

- (41) a. *ネズミに三匹猫の言葉が解った。
 b. *先生たちに四人隠し芸が出来るとは知らなかった。
 c. *入院患者に五人血液が要る。
 d. *先生たちに数人あだ名がある。

Shibatani (1977, pp. 801—02) は、与格主語が主格化して「が」をとると、QF を受けても全く問題のない文となるとしている。しかし、「に」が「が」に変わったときの文法性に関しては個人差があるように思われる。参考のために Shibatani が論拠の 1 つとしている例文を引用しておく。((42)(43)(44)はそれぞれ Shibatani 論文の(39b)(40b)(41b)を日本字にもどしたもの)

- (42) これらのこどもたちが三人英語がわかる。
 (43) 世界中の労働者が大勢お金が要る。
 (44) アメリカの百姓が多数お金がある。

一方、これら派生主格を用いた文が不自然だと感ずる被験者も、一様に、「に」より「が」の方が良いとの反応を示すことも事実である。さらに、派生主格ではなくて、もともと主格であっても、QF を受けるとかなり抵抗のある文もある。

- (45) a. 一丁目は、三軒の家が新しい。
 b. ??一丁目は、家が三軒新しい。
 (46) a. 三十人の選手が関西出身です。
 b. ??選手が三十人関西出身です。

以上のことをも含めて、一般に、SU からの QF に関して次の仮説をたてる

ことができるように思われる。

- (47) 状態述語を伴う文では、存在および一時的な状態をあらわす場合以外には、主語から数量詞を遊離すると文法性が下がる。

これは、以下のような事情による。まず、意味的にみると、数量詞が名詞句内にある場合は、その名詞を特定化する力が強いのに対して、QF は元所属していた名詞を不特定化する働きを持っている。

- (48) a. 高速道路でこの二台の車を見かけた。
b. 高速道路でこの車を二台見かけた。

(48a)は、例えば警察が犯人の車（特定）を捜していて、話者がその問題の2台の車を目撃したというような場合の表現であるのに対して、(48b)は、ある車種の車を話題にしていて、その種の不特定な車を2台見たという表現である。また、

- (49) a. 太郎は二人の息子を失った。
b. 太郎は息子を二人失った。

(49a)では、二人しかいなかった（従って特定の）息子を二人とも失ったという含みが強いのに対して、(49b)では、何人の息子がいたか暗示されていない。

次に、「日本語では、状態を表わす述部の主語に数詞・数量詞が含まれていないと、その文は（総記の解釈の文としては文法的であるが）、中立叙述の文としては非文法的になる。」¹³⁾そこで、前述の、数量詞がもつ意味的な働きを考え合わせると、状態述語の文ではSUが特定のものでなければならず、SUの名詞句内の数量詞が、主語を特定化する役割をしているものと思われる。事実、状態述語が不特定なSUをとると、極めて坐りの悪い文となる。

- (50) ??誰かが美しい。

13) 久野(1973)、p. 35。

従って、状態述語の SU からの QF は、この条件に違反することになる。

(47)の制約で存在および一時的な状態を表わす場合を除いたのは、状態述語であっても、

(51) ここにリンゴがある。

のように存在を表わす場合や、

(52) あっ、先生、学生が病気です。

のように、一時的な状態を表わす場合には、もともと SU が数量詞を含んでいなくてもかまわないからである。以上のような理由で(47)を仮定する。

ところで、議論を与格主語からの QF に戻すと、一般に、与格主語をとる述語は、所有・可能・必要を表わす状態述語に限られる。従って、与格主語を含む文は(47)の影響下にあり、QF が非文を生ずるのは(47)に反するためだと考えられる。(47)は文法関係論・格論に対して補完的な役目を果たすと思われる。

さて、日本語には、三上章 (1953, p. 234) が「ガノ可変」と呼んだ現象があり、関係詞節、名詞句補文等、ある種の埋め込み文の中で SU が随意的に属格の助詞「の」をとることができる。関係詞節の場合を一例として挙げておく。

- (53) a. 大臣が泊ったホテル
b. 大臣の泊ったホテル

SU の認定テストをしてみると、

- (54) a. 大臣が自分一人でお泊りになったホテル
b. 大臣の自分一人でお泊りになったホテル

主格の場合も属格の場合も共に SU として働いていることがわかる。

Shibatani (1977) はこの「ガノ可変」の現象と QF の関係に着目し、次の例文(55)―(57)を示すことによって、c 文の非文法性もやはり QF が格に依存していることを示す証拠だと論じている。([]内の番号は Shibatani 1977

の番号)

(55) [= (46)]

- a. [s三人の先生が買った]_s 本
- b. [s先生が三人買った] 本
- c. *[先生の三人買った] 本

(56) [= (47)]

- a. [sみんなの先生が帰った]_s こと
- b. [先生がみんな帰った] こと
- c. *[先生のみみんな帰った] こと

(57) [= (48)]

- a. [sみんなの先生が偉い]_s 理由
- b. [先生がみんな偉い] 理由
- c. *[先生のみみんな偉い] 理由

しかし、上の観察に対しては、反例を挙げることができる。

- (58) a. [sたくさんのヒッピーが集っている]_s 場所
 b. [ヒッピーがたくさん集っている] 場所
 c. [ヒッピーのたくさん集っている] 場所

(58c)は、(58b)と同様、問題なく許容されると思われる（一方、文法関係論では、SUからのQFとして(58c)の説明がつく）。

また、特に、存在文が埋め込まれている場合も、

- (59) a. [s二つの玄関がある]_s 家
 b. [玄関が二つある] 家
 c. [玄関の二つある] 家
- (60) a. [s三人の男の子がいる]_s 家
 b. [男の子が三人いる] 家
 c. [男の子の三人いる] 家

全く文法的な文である。(58c)(59c)(60c)は、表層の格が QF の適用の鍵を握るとする格論にとって、「ガノ可変」との関係が決定的証拠とはなり得ないことを示している。

さらに、格助詞「に」を伴う名詞から数量詞が遊離していても問題なく許容される文がある。

- (61) a. 途中で父兄に三人会った。
 b. 停留所に二カ所停まり、バスはふたたび海の見える道に出て、大きく左へ曲り、しだいに海から遠ざかった。
 (吉行淳之介『夕暮まで』)

(61)は、文法関係論・格論のどちらにとっても不都合な例であろう。Shibata-ni は本文中の説明では QF が表層の格範疇に依存する規則であるとしているが、反論に対して p. 801, n. 14 では、埋め込み文での格による説明を与えている。しかし、(61)は表層においても深層においても主格あるいは対格とは考えられず、現在のままの格論では解決のつかない反例であると思われる。

以上の考察で、文法関係論にも格論にも不都合なところがあることが明らかになったと思う。

ところで、これまで、SU・DO・IO といった文法関係を、一義的に定義しないまま用いてきた。そのこと自体に特別問題があるわけではない。なぜならば、いかなる文法理論においても、何らかの範疇を理論上の元素とし、一義的な定義を与えないままに用いるからである。丁度、定義を与えないで公理を認めるのと同様である。しかし、何の理由もなしに元素を定めているわけではなく、あるものを元素として認めることにより、言語についての有意義な一般化が可能になると考えているからである。そして、当の元素に関しては、定義を与えない代わりに、その文法的特徴を用いて認定するという方法がとられている。例えば、生成文法の場合、S、NP、VP といった範疇を、定義を与えないままに用いている。SU、DO といった範疇は、元素である S、NP、VP などによって派生的に定義されるのみである。これとは逆に、SU、DO、IO などの範疇を、

定義を与えないままに元素とすることも可能である。しかし、それらを元素とすることによって、有意義な一般化が可能にならなければならない、かつ、文法的特徴を頼りにしてその認定ができるものでなければならない。

日本語の場合、SUについては、(31)の規準によって認定することができる。しかし、DO、IOを認定する規準があるかといえ、一方を他方と区別して明らかにする規準に今一つ欠けている。DOのみ、あるいはIOのみが引き起こす統語現象が発見されていないからである。また、SU、DOのみならず、IO、OOからのQFと考えられる例がある以上、受動化や語順を手がかりにして考えられている規準に照らしてすら、QFについての一般化が得られる状態ではない。従って、QFに関する限りでは、SU・DO・IOといった範疇を元素とすることに対して否定的であることになる。しかし、文法関係論を全く捨て去る積極的な理由も、これまでの観察からは出てこない。DO・IOを認定する文法的特徴が見つかるまで、あるいは、格論による分析で説明し尽せる状態になるまで、最終的判断が出来ない。

IV QFの談話制約

前節でもQFによる不特定化という意味的側面に触れる機会があったが、QFを受けたものとそうでないものとの間に、別種の意味の違いがみられる¹⁴⁾。

(62) a. ここに、一つの家庭がある。

(庄野潤三『舞踏』)

b. ここに、家庭が一つある。

(62a)は何があるかに焦点があり、(62b)では家庭がいくつあるかに焦点が置かれている。つまり、線的配列の順序で言うならば、後に位置しているものに焦点がある。

14) この点に特に注目した場合、QFを変形と考えないで、数量詞をそれぞれの位置に深層の段階から設け、数量詞の領域を意味解釈規則で決定することも考えられるが、その分析でも、領域が文法範疇によるのか格範疇によるのかの問題がでてくる。本稿では、QFを変形として扱っている。

これに関連して思い起こされるのが、プラグ学派の機能的構文論 (Functional Sentence Perspective, 略して FSP) の、文中の要素はそれらの担う情報伝達力の程度に応じて、情報量の少ないものから情報量の多いものへという順で線的に配列される、という一般原理である¹⁵⁾。話し手が聞き手には既知の事柄だと判断している旧情報は情報量が少なく、他方、話し手が聞き手には未知の事柄だとして伝達しようとする新情報の情報量は多い。そこで、上の一般原理を「旧情報から新情報への原理」と呼ぶことにする。これは、プラグ学派の FSP をとり入れた談話文法である機能主義 (Functionalism) での重要な原理となっている。(62)とこの原理を考え合わせると、QF は当該の数量詞が新情報を担っていることをより際立たせる効果を持っていることがわかる。逆に、数量詞が旧情報を担っている場合に QF を適用すると、この原理に違反することになる。そこで、QF に対して次のような談話制約を提案する。

(63) QF の談話制約

QF で遊離する数量詞は新情報を担っていないなければならない。

この制約は、既に触れた文法関係論でも格論でも説明できない言語事実に説明を与えることができると思われる。一般に、主題となっているものは旧情報を担っている。日本語の主題は、多くの場合、「NP は」の形式で表わされるが、談話制約(63)は、NP が新情報の数量詞を含んでいる場合には QF を許し、旧情報の数量詞を含んでいる場合には QF を阻止すると予測する。例えば、(64)の下線部は主格主語を主題化したものと考えられるので、文法関係論も格論も共に QF を許してしまうが、(63)によれば、「二人の」が談話中で既に旧情報となっているために QF は不適格文を生ずる、と予測する。事実、この文脈で QF を受けると不適格文が生ずる。

(64) 弟にこんな話を聞いたことがある。

オールナイト食堂で会った二人の男の話だ。

.....

15) Firbas (1966)、p. 240 を参照されたい。

二人の男は御飯と玉子焼を注文した。

(庄野潤三『相客』)

(65) *男は二人御飯と玉子焼を注文した。

この現象を構文的にみて、「主題化された NP に QF を適用することはできない」と言うことはできない。主題化された NP 内からでも、新情報を持つ数量詞は遊離することができるからである。

(66) a. 座敷は下に五つ、二階に七つある。

(山本周五郎『山彦乙女』)

b. が、そういう本は大概お栄の部屋へ持って行ってあった。

(志賀直哉『暗夜行路』)

c. 前には堆かった松葉の束は、それぞれ持ち運んだあとと見えて、片隅に四つ五つ残されているばかりであった。

(三島由紀夫『潮騒』)

さらに、(67a)で旧情報を担っていると考えられる「二つの」が遊離した(67b)が不適格なことは、談話制約(63)が、主題化とは無関係に正しいことを示唆している。

(67) a. 私自身その二つの方法を好んでいないので、彼女の願いを聞き入れてしまう。

(吉行淳之介『暗室』)

b. *私自身その方法を二つ好んでいないので、彼女の願いを聞き入れてしまう。

文法関係論や格論を統語面からのみ修正したのでは、(67b)を派生してしまう。

V まとめ

QF は多くの言語に存在するが、果して何がこの現象の引き金になっている

のか、その条件は何かということが問われなければならない。英語においては、SUのみがQFを許す、という論が成立し得る。一方、日本語については、文法関係が関与していて、SUおよびDOがQFを許し、IOとなるとかなり抵抗のある文が生じると言われてきた。他方、日本語・朝鮮語などの資料を基にして、QFは文法関係によってではなく、表層の格によって決めるのだという主張がShibatani (1977)によってなされている。そこで本稿では、両分析を比較検討したが、現在のままではどちらにも不都合な言語事実があることを指摘した。その過程で、状態述語を含む文からのQFに関する制約を提案した。また、文法関係を範疇として認めるにはその認定規準に欠ける上、日本語のQFに関する限り、現時点では、それらを理論的要素として認める積極的な理由がないことを述べた。さらに、QFが文法関係によるとする分析でも格範疇によるとする分析でも解決のつかない言語事実の一つを指摘し、文-文法の範囲でのみの考察では捉えられない制約として、談話文法の立場から、数量詞が旧情報を担っている場合にQFを適用すると不適格文を生ずる、という制約を提案した。これは談話文法による一つの試みにすぎないが、これまでになされた談話文法によるQFの研究は、筆者の知る限りでは、ほとんど皆無である。今後、QFについて談話文法の立場からも研究を進めて行き、文法関係論・格論の妥当性が問われるべきだと考える¹⁶⁾。

(筆者は関西学院大学商学部専任講師)

<参考文献>

- Cole, Peter and Jerrold M. Sadock, eds. *Syntax and Semantics 8: Grammatical Relations*. New York: Academic Press, 1977.
- Dougherty, Ray C. "A Grammar of Coördinate Conjoined Structure: I." *Language*, 46 (1970), 850—98.
- Firbas, Jan. "Non-thematic Subjects in Contemporary English." In *Travaux Linguistiques de Prague*, 2 (1966), 239—56.
- Gary, Judith Olmsted and Edward Louis Keenan. "On Collapsing Grammatical Relations in Universal Grammar." In *Syntax and Semantics 8: Grammatical Relations*.

16) 井上(1978)、p. 174は、視点による規定の可能性を示唆している。

- Eds. Peter Cole and Jerrold M. Sadock. New York : Academic Press, 1977, pp. 83—120.
- Harada, S. I. "Honorifics." In *Syntax and Semantics 5 : Japanese Generative Grammar*. Ed. Masayoshi Shibatani. New York : Academic Press, 1976, pp. 499—561.
- 井上和子、『変形文法と日本語 上』大修館、1976。
- 井上和子、『日英対照 日本語の文法規則』大修館、1978。
- Johnson, David E. "On the Role of Grammatical Relations in Linguistic Theory." *Papers from the 10th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Chicago : University of Chicago Department of Linguistics, 1974, pp. 269—83. (a)
- Johnson, David E. *Toward a Theory of Relationally-Based Grammar*. Diss. University of Illinois 1974. Indiana : Indiana University Linguistics Club, 1976. (b)
- Johnson, David E. "On Relational Constraints on Grammars." In *Syntax and Semantics 8 : Grammatical Relations*. Eds. Peter Cole and Jerrold M. Sadock. New York : Academic Press, 1977, pp. 151—78.
- 神尾昭雄、「数量詞のシンタックス——日本語の変形をめぐる論議への一資料」『言語』6 (1977)、83—91。
- Keenan, Edward L. "Toward a Universal Definition of 'Subject'." In *Subject and Topic*. Ed. Charles N. Li. New York : Academic Press, 1976, pp. 303—33.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie. "Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar." *Linguistic Inquiry*, 8 (1977), 63—99.
- 久野 暉、『日本文法研究』大修館、1973。
- McCawley, Noriko A. "Reflexivization : A Transformational Approach." In *Syntax and Semantics 5 : Japanese Generative Grammar*. Ed. Masayoshi Shibatani. New York : Academic Press, 1976, pp. 51—116.
- 三上 章、『現代語法序説』刀江書院、1953。(本稿での参照頁は、くろしお出版、1972、の復刊版による。)
- 奥津敬一郎、「数量的表現の文法」『日本語教育』14 (1969)、pp. 42—60。
- Perlmutter, David and Paul M. Postal. *Lectures on Relational Grammar*. Given at Linguistic Institute, University of Massachusetts, Amherst. 1974.
- Postal, Paul M. *On Raising : One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. Cambridge, Mass. : The MIT Press, 1974.
- Postal, Paul M. "Avoiding Reference to Subject." *Linguistic Inquiry*, 7 (1976), 151—82.
- Shibatani, Masayoshi. "Grammatical Relations and Surface Cases." *Language*, 53 (1977), 789—809.